
よくある話

大野 英幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よくある話

【Nコード】

N0710I

【作者名】

大野 英幸

【あらすじ】

どこにでもあるありふれた、よくある話を。

絵描きは描く。キャンパスに自分の心が映し出した物を。

キャンパスは描かれる。何も無かった所から何かが産まれていく。

絵描きは産み出す。真っ白なキャンパスに、生きた証である証拠を。

生きた証は描かれる。キャンパスに産み出され、一つの命を与えられる。

生きたの証は描き変えられる。絵描きが描き続ける内に訂正を重ねてゆく。

何の事は無い。絵描きがキャンパスに描くものは、例えて見れば人生そのものなのだ。

光と影、明と暗、表と裏。

自分が生まれて、描く前の出会った心の変化。描いた後の見てきたものの変化。何もかもが映し出される。描かれる。

絵描きは描く。キャンパスには思いのままに描いてゆく。

絵描きは描く。筆を手に取り、彩色を施していく。

キャンパスは施される。絵描きの心の姿を。心に投影された景色を、人を。

いつかは絵は完成するだろう。しかしそれは評価されるために描いているわけではないのだろう。

その絵は絵描きの誰にも教える事は無い、自分の心を投影しているものなのだから

.....

世界は回る、時は動く。

世界は時と並行して進んでいく。休む間も無く進んでいく。

何人が時が戻ってくれないかと願ったのだろうか。戻るはずも無い物を願ったのだろうか。

壊れた玩具は元には戻らない。戻そうとして直せば、それは以前あった物とはまったく違うものが完成するだろう。

新しい物を買えば良いか？ だがそれは今まで自分が使っていた物とはまったく違うモノが置かれることだろう。

姿かたち、重量感、接触感。すべてがまったく同じモノでも、以前自分が使っていたものとは違った感覚が芽生えるだろう。

考えて見れば当たり前前の事である。それはまったく違う「モノ」なのだ。

「という事を日中、休む間も考えずに思考していたわけだがどうだろうか」

私は友人と一緒に絵を書いている。

すぐ真横に隣接し、キャンパスを並べ、画材を好き勝手気ままに置ける場所におき二人でキャンパスに向かっている。

友人の風貌は青ヒゲ。と言って差し支えは無い立派なヒゲを生やした中年の、少し太った男が筆を手に取り持論を振るった。

「ええいい色が飛び散るわ。やめんか」

水彩具を好んで使う彼は、これでもかといわんばかりに水に溶かした色を使う。やりすぎだと言われても「これは私のポリスィーだ」と。

いや別にそれは構わない。芸術は人それぞれだ、だが芸術と言ってもこうも隣接しながら一緒に書く理由がわからない。

「できたぞ。どうだ！ これが私の描きたかった物だ！」

いくらなんでも早すぎる。この間0.3秒でできたと漫画的表現を使ってもいいぐらいだ。

どんなものか、と見てみれば、早くできる理由がわかるわけだ。「貴様、こういうことをやるなら他の場所でやってくれ。そもそも隣同士で描きながらやることじゃないだろう……」

水に溶けた具剤をキャンパスに打ち撒けるぞハツハアー！

やっちまうぞ〜いいのかあ〜？ そおいつ！

そうだ、そんな感じの、モヒカン頭が暴れてのた打ち回って作ったような感じの物だ。

何の因果か、この中年はモヒカンだ。頭の中央を縦に、後頭部までまっすぐ棒状になるように剃られている。

毛の量が少ない分、頑張ってなんちゃってモヒカンにしているのは間違いはない。

と、いつか彼事体が既にモヒカンだった。何を考えていたのだろうか私は。

「俺の描きたい物がわかるか！ わからんだろう！」

わかるわけが無い。知りたくも無い。

「こいつのタイトルは『疾風怒濤』」

そのまんまだ。本当にありがとう。

染みになっている程度の、適当にやったという印象にしか受けない。

いやだがこういうものを見て感銘を受ける人もいるわけであって、一概に駄作とも言えない。

人物画はともかく、背景画やこういう………なんと呼べばいいのか。とりあえず私は無視する事にした。

こういう絵は私には価値がつけられない。合わないモノとでも言えればいいのだろうか？

正直に言つと彼には絵心は無いとは思つ。だが彼が語ってくる持論のようなものは、所々参考になるものもある。

哲學家になつたほうがいいんでは無いかと思つぐらいの人間だ。哲學家がどんな事をするか私にはわからないが。

「ところで君は何を描こうとしている。パレットを持ったまま硬直しているようだが？」

いや貴様が邪魔なんです、本当に。……と、人のせいにしたいのも確かなものだが、人のせいにしてもしなくても、言われているように確かに私の手は止まっている。

私は画家だ。今まで生きてきて何枚もの、何十枚もの絵を描いてきている。

人物画や背景画、小物や建物。絵を描こうとしたものは全て絵にして描きとめている。

だが、その絵の数々は一枚も売れた事は無い。

私は画家だ。今、目の前にキャンパスがあるというのに描くことができない。

頭では描きたいものが出来上がっているはずだった。だが体が動かない。

まるでこれから描くものは、自分から駄作だと言っているように。

長い間描き続けると厄介なものである。キャンパスに描く前に動きが止まってしまう。

自分で自分の作品を認められないというのは、良くある話だが。まさか自分にもこんな風になるとは、と少し笑つた。

笑つのは当たり前である。自分の体なのに、自分の心を映し出す事を拒否しているのだ。

心のどこかで何かがつつかえていた。何がつつかえて
いるかわかっていた。だから笑うのだ。

「今から私が描くものは評価されるか？」

友人にも誰にも言う事ではない。それは恐らく、無意識の内に自
分に対して声を出して言っていたのだと思う。

いや、間違いないだろう。心の中で描こうとしているモノを、私
の心の中で何かが鍵をつけてしまっている。

「貴様は評価されるためだけに、絵を書いているのか」

その言葉はわかっている。わかっているが、心の鍵は外れな
かった。

「いや」

何のために描いているのだろうか？ 何のために描こうとしてい
るのだろうか？

今までキャンパスに向かい、自分の気ままに描いてきた絵たちは
その幾度、何を思われながら描かれてきたのだろうか？

ここで思うことが出来上がった。

「昔はどうやって絵を描いていたのだろうか？ どうして絵を描き
始めたのだろうか？」

友人は、自分のその言葉を聞くと、髭をさすりながら少し顔をし
かめた。

「貴様は何を思い描く？ 描きたい物は無いのか？」

「どうだろうか」

素で、発言していたのがその返答だった。

何を、どういう思いで、描けばいいのか。手順は、色は、配置は

私はわからなくなってきた。よくよく考えても、考えなくても、ありふれた悩みであると言つのはわかっていたからだ。

わかっているが故、私は筆を握りながら笑うしかないのである。高笑いはずいぶん、薄ら笑いをするしかないのである。

友人は、私は今そう言う状況なのであると言つ事はわかっているようだった。

彼が思いつく限りの事は全て私に向けて言ってくれているのである。

彼の発言した言葉は覚えている。覚えているが……。

私の心には届いてはいなかった。

例えば、自分が今ここで立ち止まっている。

自分は止まっている。だが自分以外のものは動き続ける。世界の循環とはそういう物だ。

例えば、人ごみが多い所で急に立ち止まれば、誰かと何かとぶつかるだろう。

そのぶつかった物が大事な物になるか、すれ違い程度の認識になるか。

それは、意図的か偶然か。仮に意図的であったとして、目的は何なのだろうか。

同情か、慈悲か、下心か。

今まで人とぶつかった事が無い人間はいないだろう。ぶつかる人間というのは昨日や今日や、昔から遊んでいる人間か、今から大事にしていくであろう人間か。

言い方は数多くある。親でもそうである。兄弟でも、友達でもそうだ。

自分の世界でぶつかるという事は、人と出会う事ととってもいいかもしれない。

もし、親と子になる関係になるようにぶつからなければ、どうなっていただろうか。

それは誰にも分からない。産まれる以前の世界の干渉は、誰にもわかる事は無い。理解する事はできない領域なのだから。

.....

「今日は少し早い、私は帰らせていただく」

友人が、画剤を片付けはじめる。

それもそのはずだ。絵と一緒に描くようになってからはいつも一緒にいる。彼は私と一緒に描く事が好きなのだろう。

どちらかが絵をかけなければ当然つまらなくなるだろう。あれこれ言い合って描いていく絵もあるというのだが。

一方的に私だけが文句のような物を言えば、当然嫌な気分になるであろう。

「すまないな。気分を害してしまったようだ。私には謝る事しかできないが」

「謝らんでいい。貴様、今の内に気持ちと気分の整理でもするがいい。私がいては邪魔だろう。そう思っただけだ」

相変わらず直球な事だ。だがそれは時には頼もしく感じる事もある。

なんだかんだで、彼も私もお互いを友人として認識しているのだ。

「少し早い、と言った方がいい時間だ。貴様も外の空気でも吸うなり浴びるなりすればいいだろう。夜には星が見えるだろう。今日はいい天気だ」

「そうだな。そうする事にしよう」

そう、相槌を入れると彼はいつもなりとも被るトップハット……シルクハットを被り、部屋から出ていった。

夕日が窓に差込み、キャンパスの色を淡いオレンジ色に染めてゆく。

色が自然に干渉される状況では、まともな物は描けないだろう。

日が沈むまで、私は描く事をやめた。

描こうとする気はある。あるが

友人が帰ってから、私の目の前に設置されたキャンパスには何

も手がつけられていなかった。

描きたい物は決まっている。決まっているはずだが、いざ描こうとすると手が止まり、筆がキャンパスへ進まない。

視覚的にはすぐ目の前にあるのだ。腕から先が、キャンパスより遙か遠くの場所にいるような感覚だ。

腕はもがいているだろう。もがいて進めればそれが一番ばのだろう。だが進む事はないようだ。

ああ、今の自分はとても下らない事で迷っているのだろう。

友人に言われたように、私は外に出て風を浴びる。

生暖かい。が、その生暖かさが吹き抜けると体は静かに冷やされていく。

これから夜になり、星は煌き始めるのだろう。毎晩のように見ているもののだが、今夜はじっくりと眺めてみよう。

それで描く事ができれば良いのだが。

俗に言う、スランプ状態というものだろうか？ これまで書いて

きた絵は一枚も売れていない。

アマチュア以前の絵描きなのだろう。プロからすればなんて生意気な素人だと思うだろうか？

スランプはプロだからこそある、と言われるが人間であれば何かをやれば、何かにぶち当たる事は必ずあると思う。

その何か

虚栄心か、臆病か、見栄か。

何かに踊らされているのだろうか。この世界は誰かに操られるための劇場の舞台なのか。

出きることならば、今すぐにそんなものはがしてやりたい気分だ。

私は思い立った。そして再度キャンパスの前に立つ。

このキャンパスは何を描かれる事を望んでいるのだろうか？ 私
はここに何を絵として残したいのだろうか？

私は何を描きたい？ 何を思い描きたい

頭の中でイメージを構築しようとするれば、何かのモザイクのよう
な物で覆われ、部分的にしか描画する事はできなかった。

丸い円に、そこだけピンポイントで綺麗に写る。そこには……。

何もない、草原のような場所が描かれている。

背景は草原、そして朝焼けか昼間か、それとも夕焼けか、真夜中
か

それとも背景は存在しない別の物を映し出したモノか

その手前には何も描かれてはいない。

ここから描いてみればどうだろうか？

思う矢先、私は筆を手に取り、キャンパスに描いていた。

無意識か、意識内か。綺麗な緑を描こうと。

キャンパスの下半分。 そうだ。

キャンパス下半分を草原にしてみよう。 思い描いて構築できた、
イメージの一つを残すのだ。

次の日に見ればまた違うものが見えるかもしれない。

だがそんなものは今の私にはどうでもいい。

気がつけば

私の筆を持つ腕と手は動いていたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0710i/>

よくある話

2010年11月1日10時01分発行